暴れん坊メイドは
甘えん坊
My maid is violence but cute.
小説 斐芝嘉和
挿絵 ゆきうさぎ
立ち読み版

プロローグ　006
第一章　暴れん坊メイド、推参！　009
第二章　雨のちお風呂　027
第三章　想い出ひとりエッチ　048
第四章　暴走！　甘えん坊メイド　072
第五章　トラブル初体験　105
第六章　メイド・プレイ・メイド　142
第七章　朱莉の秘密　190
第八章　はじまりのおわり　205
エピローグ　253

登場人物紹介

Characters

宝飯大雅（ほいひろまさ）

大資産家の一人息子。現在は家に反発してバイトしながら一人暮らし中である。メイドというものが嫌いなのだが……。

長谷川朱莉（はせがわあかり）

大雅の実家から派遣されてきたメイド。家事万能なのだが、ちょっとしたことで感情が爆発して乱暴になる。猫のようにじゃれてくることも。

朱莉を押し倒し、抱き締めて、形よい乳房を揉みまくってみたい。乳首を舐め、クリトリスをしゃぶり、膣孔に猛る肉棒を突き込みたい。

膣は気持ちイイらしいが、本当だろうか？

熱いのか、ヌルヌルしているのか、締めつけられるのか？　どんな声で鳴くのだろう、どうしたら悦んでもらえるだろう――気になって気になって仕方ない。

だが、自分から「したい」とは言えない。

宝飯家のメイドは躾が行き届いているから、大雅が「したい」と言えば自分の気持ちを押し殺し、身体を開いて受け入れてくれるだろう。

（そんなのはイヤだ。絶対にイヤだ！）

頑なに思う少年は、それこそが優しさだと信じていた。いまここで朱莉が「イヤ」と言えば、未練を断ち切ってすぐにでもやめるつもりだ。

――が、しかし。

「む……無理じゃ、ない……」

相変わらず強張ったまま、掠れた声で朱莉が言う。

自分の言葉を行為で証明するつもりか、震える細指がおっかなびっくり、そそり勃つ淫棒に絡みついてくる。

「ふぉっ!?　く……うぅっ！」

生まれて初めて他人に握られたペニスに、えもいわれぬ快感が充満した。美少女の白い指は細く、柔らかく、なぜかヒンヤリとして――ただ握られただけの肉棒に、沸騰した血潮が逆巻きながら流れ込んでくる。ズキン、ズキン、と痛むほど拍動しつつ、さらに太く、さらに勇ましく、怒張していく。

「す、すごい……硬い……」

ゴクッと生唾を呑み込んだ朱莉は、手の中にある男根を喰い入るように見つめつつ、震える指先に力を込めていった。

熱い弾力に押し返される。掌に感じる硬さが、さらにさらに増していく。

「これが、オチンチン……男のコのコレって、こんな風に、なるんだ……」

美少女のぼんやりとした声に、大雅は確信した。

「……朱莉さん、やっぱり初めてなんだ」

「う、うん……えっ⁉　ち、違いますですわよそんなまさか！」

朦朧とした返事のあとに、しどろもどろの浮ついた否定。

デタラメな敬語と引き攣った作り笑いが、初めてだということを如実に物語っている。

（なんでこんなコトで嘘吐くかなあ……）

苦笑した大雅は快感に蕩けていく意識を懸命に掻き集め、もう一度、

「無理はしなくていいんだよ、朱莉さん」

優しい声で念を押した。
「イヤがる女のコに、こんなことはしたくない。してくれるのは嬉しいけど、でも、もし朱莉さんがイヤイヤしているのだとしたら、僕は哀しい」
「ヒロ、くん……」
ペニスを握ったまま身を捩り、朱莉が真っ赤な顔を向けてきた。
驚いているような、呆れているような、よく分からない表情。
(あ、可愛い……っていうか、あれ？　この顔、どこかで見たような……)
忘れている記憶を刺戟され、鈍感な少年がなにかを思い出しそうになった——そのとき。
「……の、バカッ！」
「ひっ⁉　ひぁあっ⁉」
勃起ペニスがギリギリと握り締められた。
痛い。
意識が吹き飛びそうなくらい気持ちイイのだが、同じくらい痛い。
朱莉はスラリと華奢な、いかにも可憐な美少女だが、ケータイを粉砕するほどの握力があるのだ。ほとんど海綿体で出来ているペニスを思いっきり握られたら、たいへんなことになってしまう。
なのに——。

「イヤならしなくていいんだよ、とか、無理ならしなくていいんだよ、とか……なんでそんなことばっかり言うの!?　自分はどうなの!?　して欲しくないの!?」
凄まじい握力で勃起状態の淫棒を握り締めつつ、無意識にしごき始める朱莉。
「痛い痛い、ちぎれちゃうちぎれちゃう……ひぎぃいっ！」
「ねえ、どっちなの!?　したいのかして欲しくないのか、ハッキリしろ！」
激痛に呻く大雅は、しかし、痛いだけではなかった。
（ああ、ああ……しごかれ、て……るぅっ！）
裸の女のコにペニスを弄られているという事実に、牡の本能が猛る。ちぎれそうなほど痛いのに、温かくてスベスベとした女のコの掌は蕩けるほどに気持ちよく――。
鬱血し、輝くほどに赤らんでいく亀頭。
揺れる尖端にプクッと膨れる、透明な滴。
痛みと快感に追い詰められ、
「や、や……優しく、してぇえ！」
ついに大雅は叫んでしまった。
途端、ハッと我に返った朱莉が弾けるように顔を戻し、夢中で握り締めていたペニスから慌てて手を離す。
「ごめん、ヒロくんが非道いこと言うから、つい……ごめんね、ごめんね」

涙を溜めた切れ長の瞳が、ますます硬くなった淫棒をジッと見つめる。
先ほどよりずっと紅い。クサビ型の肉塊は艶を増し、いまにも弾けそうだ。血流が戻った肉棹は黒光りする表面に恐ろしげな血管を浮かべ、ドクン、ドクン、と脈動している。
「い……いや、いいんだよ……僕のほうこそ、ゴメン」
怖ず怖ずとした少年の声を、今度は朱莉が聞いていなかった。
(私のせいで、こんな……すごく痛そう……苦しそう……)
癒してあげたい、痛みを散らしてあげなければ――淫棒に対する嫌悪感は徐々に薄れ、その代わりに謝罪の気持ちが膨れあがる。
同時に、なぜか胸が高鳴った。
口の中に唾液が溢れ、無意識に生唾を呑み込む。わずかに開いた唇が赤々と輝く亀頭へ、吸い寄せられるように近づいていく。
手はダメだ。昂奮するとワケが分からなくなって、加減できない。
口ならいい。小さいころは擦り傷などに唾を擦り込んでいたのだし、第一、ヒロくんだって私のアソコを舐めてくれたではないか――。
(そ、それに……お屋敷の先輩たちも言っていたじゃない。ふぇ、フェラチオっていうのは、男性の支配欲を満たすには最良の性戯だって……どんなに頑ななお坊ちゃまでも、おしゃぶりしたらきっと一発で堕ちるって……)

言われたときは「新入りメイドをからかっているんだな」と右から左に聞き流した助言を、急にまざまざと思い出した。考えてみれば、宝飯家のメイドはみな厳しく、そして優しい。あれは意地悪ではなく、大雅を慕う朱莉を思っての、親切な助言だったのか。

そうやって考えると、なるほど、先輩メイドたちはなにひとつ嘘を言っていない。大雅は確かに予想以上の堅物で、朱莉の秘裂を見、クンニまでしたクセに、いまはもう堕落を自力で拒もうとしてる。

（そういうヒロくんが好き、なんだけど……でも、それじゃあダメなのよ！）

ギュッと抱き締めて欲しい、エッチなこともいっぱいして欲しい。彼女にしてくれなくてもいいから、せめていまだけ、今年一年だけ、私を女として愛して欲しい――。

乙女チックな欲望に圧され、朱莉は決意を固めた。

この野暮天なお坊ちゃまを、堕とす。

普通の男のコのレベルまで降りてきてもらって、そして、そして――。

（私はヒロくん専用の、本物のメイドになるんだ！）

「……朱莉さん？　ねえ、ちょっと……えっ⁉　うわ、待って待って……うはっ⁉」

亀頭の尖端にプチュッとキスされ、矢のような快感に打ち抜かれる大雅。

温かく柔らかくて微かに湿ったその感触は、自分の指とはもちろん違うし、朱莉の手指ともまったく違う。もっとずっと、遙かに気持ちイイ。

しかも、一度だけではない。
角度を変え、強さを変えて、柔らかくて温かな美少女の唇がおぞましく怒張した淫肉にぷちゅ、ちゅぱ、ちゅちゅっ！
「ふひ……ひ、くぅうっ！　や、やめて朱莉さん、そんな、ダメ……ぁあッ！」
少年の悲鳴は、朱莉の心を急き立てた。
痛くしてごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい――いまこのときだけでなく、過去、どうしても伝えられなかった謝罪を込めて、青臭く香る肉塊に軽いキスを繰り返す美少女。
（彼女にして、なんて図々しいことは言わない。だから、お願い……ヒロくんのメイドとして、傍にいさせて！）
伸ばす舌に想いを込める。真っ赤に張り詰めた淫肉にレチョネチョと唾液を塗し、雄々しく張り出したエラをチロチロ舐める。
初めての口唇奉仕なのにいきなりこんなに積極的なのは、空手の修行で鍛えられた決断力の賜物だ。もはや嫌悪など一欠片もなく、
（感じて、ヒロくん……私の舌で、唇で……もっともっと、気持ちよくなって！）
肉笠と淫茎の狭間、カリ首と呼ばれるくびれ部分を――レロレロ。
弾けんばかりに張り詰めた亀頭に唇を押し当て――ちゅ、ちゅ、ちゅちゅぅぅ！

拙い技量を補って余りある、熱烈な舌技。

（ああ、ああ……ぼ、僕のオチンチンが、朱莉さんに、舐められて、るぅ！）

シーツをギュッと掴み、淫棒に湧き上がる快感をジッとこらえる大雅。

こんなのはメイドの仕事じゃない、と頑なに思ういつもの自分が、一舐めされるたびに溶けていく。こんなに綺麗なコが、こんないやらしいことを――その戸惑いと背徳感が、肉悦を実際以上に加速する。

不器用だが一生懸命な口唇奉仕に、大雅の肉棒はたちまち涎まみれになった。何度もキスされた亀頭はますます強張り、繰り返し舐め上げられた淫茎はさらに太く、さらに硬くなっていく。

手で支えられていない勃起ペニスは、唇や舌に押されるまま右へ左へ大きく揺れる。ルビーのように輝く亀頭が朱莉の頬にぬちゃり、形よい鼻にぺたり――桜色に火照った絹肌に、唾液の筋を塗りつける。

垂れる唾液を追って、朱莉の舌が根元から筒先へツツッと滑った。

エラ縁に唾液の滴が膨れると、尖った唇が貼りつき、音を立てて吸う。

「く、あ……うぅっ！」

淫棒の芯に込み上げてくる、熱い精液。

美少女の舌が閃くたび、柔らかな唇が吸いついてくるたび、津波のような射精欲求が高

まって、先走り汁の滴を膨らませた筒先がこらえ難く疼く。
「そ……そんな、ああっ！　ダメ、そんなにされたら……ぁあっ！」
煮え滾った溶岩が、いまにも噴き出してきそうだ。
（このままでは、あ、あ、朱莉ちゃんの顔に……）
ビュクッビュクッとぶっかけてしまうだろう。
出逢って間もない美少女にそんな失礼なことはできないし、してはならない――焦りに焦り、藻掻く両手が眼前の美尻をペタンペタンとタップする。
だが、すでに昂っている少女は止まらない。
それどころか、
（これが、オチンチン……これがヒロくんの、味……！）
甘辛い牡肉の味に我を忘れ、知らず知らず口を開けて――アモッ！
紅く輝く亀頭をパックリと咥え込んだ。
「ふぁああっ⁉」
温かくヌルヌルとした柔らかな粘膜に敏感な亀頭を包み込まれて、大雅はビクンビクンと反り返る。美少女の口唇粘膜に触れた淫肉が甘やかに痺れ、稲光のような快感が背を駆け抜けていく。
「待って朱莉さん、待って待って、そんなにされたら……あうぅぅッ！」

頬を真っ赤に染めた大雅が上擦る声を絞り出すと、朱莉は照れ臭そうに目を逸らした。ついでに一旦口を離し、唾液に濡れた舌を大きく広げ――肉棒のつけ根から筒先に向け、まずは裏筋をレチョ～リ。右、左、と同じように舐め上げて、ンふ、と吐息。

（か、可愛い……いやらしい！）

演技にしては上手すぎる、本当にエッチな姿。普段とはまるで印象が違う。なにかあるとすぐに殴ってくる暴力メイドとは、とても思えない。

「……愉しそうだね、朱莉さん。そんなにオチンチンが美味しい？」

「ンちゅ、ン、ん……ぷは。美味しいよ、じゃなくって、美味しゅうございます」

根元を握った美少女は、真っ赤な亀頭に紅い唇を触れさせたまま、照れ臭そうに微笑んだ。敏感な淫肉が柔らかな粘膜にピトピトされ、熱い息にくすぐられる。

こんな美少女がこんなことまでしてくれるのだから、文句の言いようがないのだが――ただひとつ、大雅にはどうしても気になることがあった。

「うーん……いちいち言い直さなくていいよ。宝飯家のメイドはお上品に躾けられているけれど、甘えん坊のメイドがいたっていいと僕は思うんだ」

「え？　で、でも……」

ダメ出しされたと勘違いしたのか、朱莉の頬が強張った。オチンチンを握り締めたまま、いまにも泣きそうな顔になる。

「あー、いや。気に入らないとか腹が立ったとかじゃないんだよ」
苦笑した大雅の手が自然に伸び、ヘッドドレスで飾られたメイドの頭を優しく撫でた。
「朱莉さんはオチンチンが大好きな、エッチなメイドさんなんでしょ？　いまも十分可愛いけど、仔猫のように甘えてくれると、もっと可愛いと思うな」
「ひ……ヒロくん……」
蒼褪めかけていた頬が、改めてポォッと紅くなる。ペニスの傍の唇がなにか言いたそうに震え、切れ長の瞳が涙を湛えて若き御主人様を見つめ――。
「……じゃあ、エッチなメイドに御褒美ちょうだい！」
照れ隠しなのか、子供っぽく笑ってバタバタと向きを変えた。
（あ、いやその……もうちょっと舐めてもらいたかったんだけど……）
いままでになく気持ちが通じあっていたような気がしたのだが、どうやら違っていたらしい。なかなか上手くいかないものだ。
それでも――悪い気がしないのは、大雅にうしろ姿フェチの気があるから。
男性にとっての女体というのはどこをどのように切り出しても極めて魅力的なのだが、大雅の目には女性のうしろ姿、特に座っているときの背面が、乳房や秘処といったクリティカルな場所と同じくらい艶めかしく映る。いまの朱莉のように、ウエストのくびれを強調する服を着ている場合はなおさらだ。

細い肩をさりげなく隠す長い髪と、わずかに見える横顔、頬のライン。緩く伸びやかなS字カーブを描く、華奢な背筋。腕の陰からは形よい乳房が顔を覗かせているし、しゃなりと捻れた腰の先にはムッチリとした尻が優美な曲面を魅せている。

うしろ姿なら横座りが最高だが、四つん這いも悪くない――いや、ハッキリ言ってかなりイイ。胸より尻が好きな大雅にとって、双臀を見せびらかしているようなポーズはこのうえなく魅力的だ。

――で。

「もう、指じゃ我慢できないの！　お願いします、御主人さまぁ」

背を向けた朱莉がスカートを捲り、桜色に火照る桃尻を露わにしながら、その「かなりイイ」感じの四つん這いになった。それだけでもう、大雅の心臓は爆発しそうなくらい激しく高鳴ってしまう。

（くぅぅッ！　朱莉さん、最高！　……にしても、いつにも増して大胆だなあ。演技じゃなく、ホントに発情しているのか？）

自分にも我慢の限界が近づきつつあることを意識しながら、せっかくなので、少年は美少女の尻をじっくりと観察する。

最近特にムチムチし始めた瑞々しい丸みを飾るのは、細かなフリルで飾られた純白のショーツ。以前見たモノとは少しデザインが違う――というか、装飾が増えている。男性

用下着に比べたらいかにもほわほわヒラヒラとして、可憐な花を穿いているようだ。
（んん？　あれ？　変だな。普通のショーツより、縫製ラインが多いようだ……）
ふと気になり、身体を傾けて覗き込むと、腹の下から伸びてきた朱莉の白い指が見えた。瑞々しい太腿の狭間からニュッと伸び出してきた細指は、柔らかく膨らんだ股布に触れ、中央線を示すようにスッと動いて――スリットを開く。
――むにゅり。
熟れて桜色に火照る肉畝が、白い布地のわずかな隙間から絞り出されるようにはみ出してきた。先を広げる指に圧されていやらしく捲れ返り、
（おおぉぉ……ッ！）
紅くヌラヌラとした粘膜花弁が艶やかに咲きこぼれる。
「ヒロくんに……ううん、御主人様に悦んでもらいたくて、穿いたままできるショーツにしたんだ。ね？　見て見て！」
「ああ、見てるよ……すごいよ、もうネチョネチョだ」
「……？　あっ!?　ち、違う、見て欲しいのは下着……あンッ！」
朱莉の抗議を右から左へ聞き流しながら、突き出された美尻のうしろに膝をつき、その優美な曲面に触れる大雅。自分のためにいやらしい下着を穿いてくれた気持ちは嬉しいが、そのせいで異様に昂奮し、射精の瞬間がグッと近づいてしまった。

挿入欲求が一気に膨れあがり、下着を愛でている余裕がない。伸びやかな太腿の間にムニッとはみ出してきている秘部へ、左右から震える親指を伸ばし、股布のスリットを何気なく辿る――と。

（あ、濡れてる……）

当然と言えば当然か。先ほどまでオナニーをさせていたから、溢れ出した愛蜜がぬっちょり染み込んでいるのだ。

一方の朱莉は――。

「あぅ……ぁあン！　待って、ダメ、いま向きを変えるから！」

淫唇の縁をなぞられて震えるほどに感じつつ、なにやらアタフタ。

「いまさらなに言ってるの？　自分でお尻を向けたクセに……」

「ち、違うの、うしろからして欲しいんだけど、ほら、テレビが前にあるから……」

言われて視線を上げると、朱莉の頭の先に真っ暗な画面。わずかに湾曲したガラスに、四つん這いになったメイドとそのうしろにしゃがんだ大雅の姿が映り込んでいる。

「……恥ずかしいの、朱莉さん？」

訊きながら、大雅はすでにヤる気になっていた。イヤイヤと揺れる桃尻をガッチリ掴み、鋼のように強張った男根を蜜まみれの割れ目に押し当てる。

ぬちょり、と微かな音を立てて歪む温かな粘膜花弁が、力の抜けた唇のように、クサビ

型の淫肉に密着した。さらに腰を進めると、
「ああダメ……イヤ、あ、うぅっ！」
わずかに圧力をかけただけでヌヌッと、いやらしく潤んだ肉穴へ潜り込んでいく。
（ま、待て、待て待て！　朱莉さんはいま、はっきりイヤって言ったぞ！　ダメだ、向きを変えてあげなくちゃ……！）
頭では思うのに、膣口に半ばまで潜り込んだ亀頭が気持ちよすぎる。愛蜜に潤んだ粘膜に甘噛みされ、蕩けるような快感が爆発し――。
「ご、ごめん……もう、止められないッ！」
――ぬぐぷっ！
筒先からカリ首までが、一気に膣の中へ。
「ひ……非道いッ！　ヒロくん、前に、イヤならやめるって……あぅ、イヤ、ぁあッ！」
「だって、だってだって……仕方ないじゃないかッ！　朱莉さんのオマ〇コが、気持ち、よすぎ……なんだよぉおっ！」
「ふ……ぁあッ！」
淫悦に負けて半ばほどまで荒々しくねじ込むと、朱莉が細腕をピーンと突っ張り、小さな呻き声を漏らして反り返った。ふたりの正面、暗いテレビ画面では、四つん這いになったメイドが嘶くように伸び上がっている。

うっとり細められる切れ長の瞳、弛む頬、開く唇――。
「あうぅ……ほらヤダ、やっぱり私、変な顔してるぅ……！」
「だ、大丈夫、変じゃないよ、可愛いよ」
言いながら、大雅はさらに腰を動かした。いまにも暴発しそうになっている男根を、熱く柔らかく、蕩けるほどにぬめってしかも締まりのよい淫穴の奥に向けて――。
グ、ググ……ぬぶじゅっ！
「あふっ！」「くぅぅ……ッ！」
硬くむくれた筒先が膣奥の最奥部に触れた瞬間、深く繋がった少年少女は同時にビクッと首を竦め、頬を赤らめて呻いた。
ポルチオ性感帯を突かれた朱莉。
もっとも感じやすい鈴口を心地よい粘膜に拭われた大雅。
鏡の中ではふたりとも、いまにもイきそうな表情で喘ぎ、早くも汗を掻いている。悩ましげに寄せられた美少女の眉根、閉じることを忘れてしまった妖しい朱唇。
「変、変……やっぱり変だよぉ！」
駄々っ子のように身体を揺すり、朱莉は両手で顔を覆った。そのまま床に突っ伏し、絶対に見るモノか、と意思表示。
「変じゃないって。ホント、可愛いって……お願い、顔を見せてよ」

「イヤッ！　イヤったらイヤッ！」
「しょうがないなあ。御主人様の命令でも、ダメ？」
「だ……ダメッ！」
膣に深々と淫棒を挿し込まれ、半ば以上気持ちよくなったらしいメイドは、演技する余裕を完全に失っているようだ。
大雅も、同じ。
このままズンズン突けば、締まりのよい肉穴に搾り立てられ、すぐにでも果ててしまうだろう――しかし。
「じゃあ、こうしよう……」
「ふぇ……？　あっ⁉　な、なにするの……⁉」
深々と繋がったまま、蹲ったメイドの小さな背に、覆い被さる大雅。よい香りのする黒髪に頬擦りしつつ、胸に朱莉の体温を感じながら、腋の下に腕を挿し込み――メイド服の胸元を探る。
「ふぅ、はぁ……あ、朱莉さんのオッパイを見たいんだ」
「み、見るって……うしろからじゃ……あンッ⁉　み、見えない……よ？」
グリグリ動く男根に敏感な膣奥を抉られ、頬を真っ赤に染めた美少女は少年の腕の中で喘ぎ震えた。形よく柔らかな胸に不器用な手指がモゾモゾ這い回っても、恥ずかしそうに

眉根を寄せるだけで拒もうとはしない。
襟元を締めたリボンを残したまま、シャツのボタンをヘソの辺りまで外す。前身頃を掴んだ大雅が、クイッと左右に引っ張ると――ほどよい大きさの美しい乳房が、小気味よく弾みながらこぼれ出る。
とはいえ、完全な裸ではない。弾む双球を支えているのは、ショーツと同じ系統の、フリフリ過剰な純白のブラ。見るなら生乳に限るが、触れたり揉んだりするだけならば、こういう可憐な下着も悪くない。
「オッパイ、オッパイ……」
居心地悪そうにモジモジしているメイドを圧し潰すような姿勢で抱き締めつつ、ふたつの温かな膨らみにゴツい指を喰い込ませて――。
「……ああ、朱莉さんのオッパイだ」
大雅は幸せそうに目を細めた。
若く瑞々しい色気が充ち満ちた、張りのある乳房だ。圧せば圧しただけ従順に形を変えるが、力を弛めればすぐに美しい丸みを取り戻す。蠢く指を喰い込ませれば、ほんのり温かな柔肉が遠慮がちに押し返してくる。
手触りのよい乳房をむぎゅ、むぎゅ、と揉み歪めていると、
「うぅッ⁉　い、痛いよヒロくん。そんなに、強く、され……た……ら……」

（これが、朱莉ちゃんの味……これが朱莉ちゃんの、唾液……）

よく知っていたはずの感触をひとつひとつ確かめていると、不思議な感慨があった。もう慣れたと思っていたのに、どうも違う。いつもより温かく、いつも以上に味が濃く――唇は柔らかだし、舌はしなやかで、頬に吹きかかる吐息は湿っぽく熱い。

「ン……ぷはぁ……き、キス……だけ？」

「違うよ、もちろん」

トロンとした目で問うてくる美少女に、大雅は真剣な顔で応える。朱莉の口から引き抜いた舌で可愛い鼻の頭を舐め、塗りすぎてしまった唾液をキスで吸い取る。

「やぅっ⁉　そ、そうじゃなくってッ！」

力の抜けた拳で頭を軽く打たれた大雅は、美少女の柔らかな頬に、細い顎に唇を移し、ちゅぱ、ちゅぱ、と口づけを繰り返した。

（そうか……朱莉ちゃんってこんなにスベスベしてたんだ……）

改めて知った柔肌に夢中になりながらも、少しずつ身体をずらし、胸を浮かせて――仰向けに横たわっている美少女の乳房に、不器用な両手を寄せる。

服の上から揉むのは、もういい。

もどかしさを感じつつ、ボタンをひとつひとつ丁寧に外して、胸元をはだけた。焦っていたから、襟を締めるリボンを外すのを忘れてしまったが、

「……あれ？　大きくなった？　ブラがきつそうだよ？」
身を起こして見下ろすと、左右に開いた前身頃を自ら押し退けるようにして、白詰草のようなブラジャーに覆われた形よい乳房がふたつ、美しい丸みを現していた。
気の持ちようが普段と違うからか、本当に綺麗だと思う。カップから惜しげもなくはみ出している柔肌には透明感があり、肩紐はピンと張り詰めて、いまにもちぎれそうだ。
（……本当にこれが、病身なのか？）
色艶といい張りといい、朱莉の肌は健康そのもの。血色はもちろん肉づきもよく、力なく投げ出されている腕も細いながらにふっくらしている。
「なに言ってるの、ヒロくんのせいだよ？　ヒロくんが毎日毎日揉んでくるから……」
恨みがましい目つきで睨み上げてくる切れ長の瞳は、長い睫に縁取られ、黒水晶のように澄んでいる。意地悪く微笑む唇は艶めかしく紅く、野苺のようにプリッとして――。
「……ちょっと、ヒロくん？　私の話、聞いてる？」
「ご、ごめん……」
「バカ。そんなことで謝らないでよ」
クスクス笑う朱莉の目元に、涙の粒が光っていた。
大雅の想いを察し、感応してしまったのか。
普段の朱莉なら、拳を飛ばしてくる。照れ隠しだと分かっていても当たれば痛いから、

少年はついつい、ビクッと身を強張らせたのだが、
「……今日は、揉まないでね」
乱暴なはずの美少女は、一瞬真剣な顔で言ったあと、プイッと横を向いただけだった。
見た目は健康そのものでも、やはりどこか具合が悪いのか。
（痛いのかな？　苦しいのかな？）
言ってくれないのは、哀しい。
鈍感な大雅は、ちゃんと言ってくれないと不安で不安でたまらない。
「も、揉まないなら、なにをすれば……」
「顔にしていたみたいに舐めて……って、ンもうっ！　バカ！　言わせないでよ！」
照れたのか、それとも快感を予感したのか、朱莉の頬が燃えるように真っ赤になる。
（朱莉ちゃんって……本当に恥ずかしがり屋なんだな）
なにもかもが新鮮だ。
まるで初めてのときのように、大雅の身体が芯から燃える。
「じゃあ……触れるよ」
わざわざ断ってから、触れ慣れたはずのブラに震える手を伸ばし――下から、乳房と柔布の間に指先を差し込むようにして、ふっくらとした丸みに沿って上へずらし始めた。桜色に染まった瑞々しい乳肌を目にするより先に、指先や掌で、絹のような滑らかさ、ほん

のりとした温かさ、マシュマロのような柔らかさを噛み締めるように味わう。
本当に丸い。
柔らかくて温かくて、プニプニしている。
美しい曲面の頂点で、指先が乳首に触れた。
「ン……ッ！」
一瞬首を竦め、瞼を閉じて眉を顰める朱莉。
茹だったように紅い横顔を観察しつつ、大雅はさらに手を進める。硬く痼った肉豆を指の間に挟むようにして――柔らかな頂を乗り越え、白い胸丘の向こうにブラを落とす。
手を離し、改めて見下ろすと――眩いほどに瑞々しい双球が、視線に羞じらうように震えていた。朱莉の呼吸に合わせ、ゆっくり、大きく上下して――。
親指の先で簡単に隠せそうなくらい小さな乳暈が、プクッと勃起した乳首とともに、鮮やかに紅い。透き通るような柔肌は、春先の野山に咲く花のように艶やかなピンク。羞恥の汗を薄く滲ませ、しっとりはんなり輝いている。
（綺麗、だ……）
細い肩からなだらかに盛り上がり、やがてハッキリとした乳房になるライン。ブラに支えられていないうえ、重力に引かれているのに、潰れた感じはまったくしない。稜線はあくまで丸く、下乳が豊かで、思わず手を添えて重みや曲面を、指を喰い込ませて瑞々しい

弾力を確かめたくなるような――。
「……な、なに、してる……の？」
乳房を晒け出されただけでなにもされないことを訝しんだ朱莉が、横を向いたまま薄目を開け、恐々と訊いてきた。
「ん？　見てるんだよ。朱莉ちゃんのオッパイって、こんなに綺麗だったのかって」
「あ……ば、バカッ！　変なこと言わないでよ！」
耳の先まで赤らめた美少女が、慌てて両手を胸に被せようとした。
珍しいことに、大雅は素早く動き、その細い手首をガッチリ掴む。
「隠さないで。目に焼きつけておきたいんだ。朱莉ちゃんが居なくなっても、絶対に忘れないように……」
「え……？　な、なに言ってるの？」
「居なくならないって約束してくれたら、こんなに見ないでもいい……約束してよ、朱莉ちゃん。時間がないなんて、嘘だって……僕と、ずっと一緒に居てくれるって」
「う、うん……ずっと一緒に居る……よ」
朱莉らしくない、弱々しい返事。
（そりゃあそうだよな。いくら朱莉ちゃんでも、この状況はきついだろうな……）
哀しみが顔に出ないよう注意しながら、大雅は思う。交わす言葉はどうしても無理な願

いになるし、嘘の約束になってしまうから、朱莉も心苦しいのだろう。
お喋りは無駄だ、と思う。これ以上互いの気持ちを探りあっても、やがて来るであろう哀しみを先取りして辛くなるだけ。
いま必要なのは、虚空に消える言葉のやりとりではなくて――。
（朱莉ちゃんを……朱莉ちゃんのすべてを、しっかり覚えておくんだ）
しっとり汗ばんでいる乳谷に、吸い寄せられるように顔を寄せる。
ほのかに漂い上る甘酸っぱい牝香。頬に感じられる柔らかな体温。
気持ちを込めて見つめると、朱莉の柔肌には不思議な透明感があった。まるで蜜にくるまれた白玉のようで、ほんのり赤らんでいるのはその内側。美少女の温もりも身体の表面ではなく、ずっとずっと深い場所からじわりと滲み出てくるような――。
（もっともっと……朱莉ちゃんを知りたい！）
微かに震える柔らかな丸みに、想いの丈を込めた熱いキス。
「ふぁ……ッ！」
仰向けに横たわったメイドがビクッとして、大雅の頬の傍で乳房が揺れた。ふわふわと漂っていた女のコの香りが、グッと濃くなる。
（ああ、これが朱莉ちゃんの匂い……）
レモンかライムか、オレンジか。

爽やかな柑橘類に似た、それでいてどこか甘やかな、不思議な香り。
胸いっぱいに吸い込むと、自分の身体が朱莉に染まっていくような気がする。桜色に火照る肌にチュパ、プチュ、と吸いつけば、美少女のエキスを啜っているような気分になる。
「あン……やンッ！　そんなに強く吸われたら、痕がついちゃう……」
「僕以外、だれも見ないんだから、平気だよ」
「で、でも……ぁうンッ！」
少女の抗議を、さらに強い口づけで封じる大雅。
むしゃぶりついてくる少年になにを感じたのか、薄い瞼を閉じ、恥ずかしそうに頬を赤らめて、横を向いて唇を噛む朱莉。
（これは――餅肌って言うのかな？）
メイドの抗議が消えたことにも気づかずに、大雅は甘酸っぱい乳房に意識を集中。
伸ばした舌で美しい曲面に唾液を塗し、垂れそうになる滴をプチュッと吸う。双球の頂点にある紅い乳暈や健気に勃った乳首が気になるが、まずは汗の味がする谷間や豊かな下乳、シャツに半ば埋もれている側面などを集中的に舐め続ける。
（しっとりして、スベスベで、舌や唇にヒタッと吸いついてくるような……肌理（きめ）が細かいってのは、たぶんこういうことなんだろうなぁ……）
美少女の柔肌はどこまでも滑らかで、唇に心地よく温かかった。舐めれば舐めるほど味

がよくなる、巨大なマシュマロのようだ。
しかし――プルンプルンと弾む乳房は意外に大きく、舐めても舐めてもなかなか征服できなかった。
（普段はブラに押さえられているせいなのかな？　朱莉ちゃんのオッパイって、こんなに丸かったんだ……）
語彙の少ない少年は、ただただ「丸い」と思うしかない。上から見ても潰れていなかったが、こうして顔を寄せ、横から見つめても、やはりしっかりと丸い。
それでいて、決して硬くはない。
大雅が唇を押しつければ、圧された分だけ歪む。離せばすぐに戻る。フニャフニャではなく、まさにプニプニ。見るだけなら尻のほうが好きだが、触れたり撫でたり揉んだり、舐めたりキスしたり頬擦りしたりするのは、乳房のほうが愉しいかもしれない――と。
「く……ふぅ……ンッ！」
しばらく声を抑えていた朱莉が、大雅の唇に合わせてピクッと震えた。
見れば、乳暈の縁にキスしていたところ。
（うわぁ……さっきより、一段と紅くなっている。やっぱりココ、敏感なのかな？　触れた感じはほかの肌とたいして変わらないのに……）
不思議に思った少年は、イチゴミルク色の柔肌とワインレッドの乳暈の狭間をなぞるよ

うに、ツゥッと舌を回した。
途端、
「や、ぁあンッ！」
それまで静かだった美少女が慌てたように藻掻き、キスマークに彩られた双球をユサユサと揺らした。本当は覆い被さる少年を突き離したいのかもしれないが、両の手首は大雅がしっかりと掴んだまま。
（イヤがってる……んじゃないな。恥ずかしがってるんだ）
なぜ恥ずかしいかというと、感じてしまうから――ならば、なおさらやめられない。朱莉をもっともっと悦ばせたくて、大雅は一生懸命舐め続けた。
「やめて、ダメ、そこは……ぁあンッ！」
鼻にかかった甘え声に触発されて、真っ赤な乳首を集中的に責める。尖らせた舌先で乳頭をせせったり、硬く勃起した側面をチロ、チロ、と舐めたり。
そのたびに、「ふぁ」とか「はぅん」とか、上擦った吐息が聞こえる。
胸の下で少女の細い身体が跳ねるようにくねり、桜色に輝く乳房が小気味よく揺れる。
「ここがイイんだね、朱莉ちゃん？」
「よ、よくない、全然よくな……ぁあ、イィッ！」
照れ屋の嘘は無視して、大雅は弾む乳房の尖端にムチュッと吸いついた。口を開きつつ、

滑らかな乳肌に唇を滑らせるようにして、柔らかな丸みの頂を咥え込む。
口を被せたまま、瑞々しい乳肌に息を吹きかけると、
「あぁ……」
熱く湿った感触が気持ちよかったのか、悶えていた朱莉が掠れた吐息を漏らして脱力した。そのまま舌をくねらせ、コリ、コリ、と引っかかる乳首の周囲を舐め回すと、熟れ柿のように赤らんだ顔を左右に揺らし、長い黒髪をわずかに波打たせる。
「ほら、やっぱりイイんじゃないか」
「よくないもん……か、片ッぽだけじゃ、イヤだもん」
「あ、そういうことか……じゃあ……」
「あっ⁉　うぅ、ぅぅうっ！」
もう片方の乳房に唇を被せ、同じように乳首を責めると、胸の下の朱莉は身を捩って脚をバタバタさせた。逃げようとしているのではなく、感じすぎてジッとしていられないだけ。その証拠に――大雅が手を放すと、くねる細腕は胸を突かずに、首に絡みついてきた。さらなるキスを求めるように、少年の頭を自分の胸に抱き締める。
「ダメ、ダメ……オッパイは、もういいよぉッ！」
言葉と行動がまるで逆。
溢れる声が上擦り掠れ、呼吸が艶やかに乱れた。形よい乳房の尖端を咥えた大雅が、閃

く舌先で勃起乳首を弾くたび、細い顎が上がり、白い喉が震える。
（朱莉ちゃんって、ここで感じるんだ……それに、この声……いままでの僕は、すぐに無我夢中になっていたのか、じっくり聞いたことなんか一度もなかったな……）
毎日のようにエッチしていたはずなのに、新発見が多すぎだ。反省の気持ちも込めて、大雅はさらに舌を使う。
乳首から離れ、乳麓へ唇を滑らせ――身体を徐々に退けながら、鳩尾にキス。
「ぁうッ⁉　や……やだ……今日のヒロくん、変だよ……」
くすぐったそうな声で言いながら、一息吐いた朱莉が腹に下った少年の頭を撫でた。変だ、変だと言ってはいるが、決してイヤではないらしい。
――というか、むしろ悦んでいる。
「ガツガツしてるクセに、妙に優しい……いつもはペッティングなんか、ロクにしてくれないのに……」
「ごめん。いままでの分を取り返すつもりで、頑張る」
ゆさゆさと揺れる乳房越しに美少女の視線を感じた大雅は、神妙な気持ちで謝った。
（そうだよなあ。朱莉ちゃんが積極的だから、僕はほとんどなにも考えてなかった。朱莉ちゃんを悦ばせようだなんて、ちっとも思わなかった。なんてバカなんだ、僕は……）
男としては、温かくてヌルヌルした膣にオチンチンを包まれたらもう十分。蕩けるほど

に気持ちイイからほかにはなにも要らないけれど、女のコは違うのだろう。そんな当たり前のことにいまごろ気づくなんて、本当にバカだ。

謝罪するような気持ちで、なだらかに起伏する腹にキス。くすぐったそうに笑う朱莉の声が、大雅の耳には心地よかった。

それに――こうしていると、美少女の身体はいかにも華奢で、ただの腹にも不思議な艶めかしさがある。白く、柔らかく、温かくて、頬や唇に気持ちよく、ゆさゆさ弾む乳房やムチムチとした尻と同じくらい魅力的だ。

「あンッ⁉　や……おヘソは、だ、ダメェえっ！」

裏返った声を上げ、大雅の頭をクシャクシャと掻き回す朱莉。

かなりくすぐったいらしく、横たわった身体が跳ねて捩れる。メイド服のフレアスカートが捲れ返るのも構わずに、伸びやかな脚をバタバタさせる。

「乳首も敏感だし、おヘソもダメなのか……朱莉ちゃんって、感じやすいの？」

「え……⁉　ば、バカッ！　知らないわよそんなこと！」

ポカリ。

いつものように殴られたが、力はまったく入っていない。いや、力を入れていないのではなく、入れたくても入れられないのか。

「ヒロくんのバカ、意地悪ッ！　いくらなんでも焦らしすぎだよ」

拗ねたように口を尖らせたメイドが自らの手でスカートを捲り上げ、生ッ白い太腿を露わにした。なおもヘソに執着する大雅の額を押し、

「そ、そこは……もう、いいからぁ！」

熟れ柿のように頬を赤らめ、鼻にかかった甘え声。

自分でも知らなかった性感帯を大雅に見つけられ、恥ずかしくなったらしい。膝を立て、尻を浮かせて、自分からショーツを降ろす。

「もういいから……しよ？　してよ、ヒロくん……」

「う、うん……」

ようやく身を起こした少年は――すぐ目の前に横たわる美少女のしどけない姿に、思わず息を呑んだ。

（朱莉ちゃんって……こんなに可愛かったんだ……）

恥ずかしそうに横を向いた頭の先に、黒く艶やかな黒髪が妖しい渦を巻いている。柔らかな頬は燃えるように紅く、拗ねたような唇はプックリとして――。

襟はリボンで締められたままなのに、シャツはヘソまで大きくはだけられていて、上にズレたブラに飾られた乳房が大きく丸く、ほんのり桜色に輝いている。鮮やかに紅い乳暈と、弾けんばかりに勃起した乳首――大雅が執拗に舐め続けていたせいか、淡いピンク色に火照る双球も、その尖端を彩っている肉豆も、ヌラヌラといやらしく輝いていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ http://ktcom.jp/ 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!